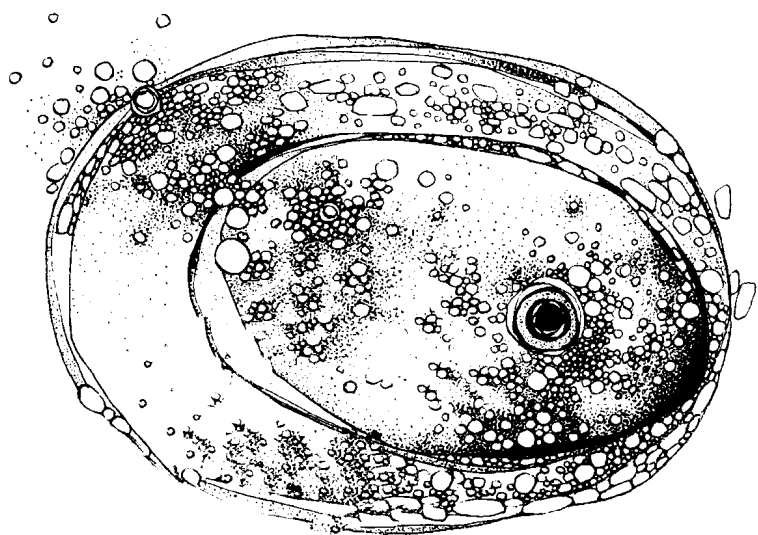




湿った空 乾いた空 吉行淳之介 新潮社



©Junnosuke Yoshiyuki 1972 Printed in Japan

湿しめった空そら乾かわいた空そら

昭和四十七年二月二十五日発行

昭和四十七年四月二十日二刷

著者 吉行淳之介
よしゆきじゆんのすけ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

電話 東京(03)二六〇一一二二

振替 東京八〇八

印刷所 株式会社精興社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価 五五〇円

目
次

「感情旅行」という言葉について

外国を旅行するということ

ついに外国に出発のこと

ラスベガスで大喧嘩をすること

横文字を縦にすること

賭博の町ラスベガスの一度目について

ふたたび「大喧嘩」について

二度目のラスベガスのこと

沙漠で旨いものが食えるだろうか

招待旅行というものについて

金属とアスファルトの街で

外国語を喋ることにについて

行動力の旺盛さについて

ニューヨークで退屈しはじめること

巴里で下痢をしつづけること

車のなかは外国ではない
 山奥の村から海沿いの都まで
 黄色い東洋人が歩いてくる
 モンテカルロの賭博場で
 青い海と茶色い海と黒い海
 あるレストランでの出来事
 咽喉に刺さった骨について
 衰退国は居心地がよいということ
 スペインは闘牛の国であるか
 薔薇荘という中華そば屋で
 ライフルを構える女たち
 透明な箱が移動してゆくこと
 街の娼婦たちについて
 色彩の氾濫のなかで立竦む
 あとがき

装
幀
池
田
浩
彰

湿
っ
た
空
乾
い
た
空

「感情旅行」という言葉について

この作品の傍題を、「私の外国感情旅行」とするつもりである。『得能五郎の生活と意見』および『伊藤整氏の生活と意見』という題名については、いまとなつては説明する必要がないとおもう。十八世紀のイギリスの風変りな作家ロレンス・スターンの作品『紳士トリストラム・シャンドイの生活と意見』という作品に触発された題名である。スターンは、ジェームズ・ジョイスが影響を受けた作家で、ジョイスについて造詣の深い伊藤整としては、これらの題名をつけるに当って、いろいろ考えるところがあったであろう。

スターンは牧師だったが、その職とは縁遠い作品を生涯に二つだけ書いた。も

う一つは『ヨリック氏によるフランスおよびイタリイ感情旅行』というものである。

私は大学英文科を中退したが、入学と同時に卒業論文はスターンについて書くことにきめていたので、いくぶんの知識がある。

ところで、安岡章太郎に『アメリカ感情旅行』という作品がある。昔、安岡と毎日のように会っていたころ、私はスターンについて彼に解説を試みたことがある。「センチメンタル」という言葉は、いまの世の中では「感傷的」という意味で使われているが（丁度、「センチメンタル・ジャーニー」というロマンチックな映画が評判になっていた）、十八世紀では「感情」あるいは「感情の揺れ動き」という意味に使われ易かった、というようなことも言った。

もっとも、安岡がそのことを覚えていて『アメリカ感情旅行』という題名をつけたのかどうかは、私には分らない。

これまでに、私は三度外国へ行っている。最も長い旅行が二カ月足らずだから、ただ通り過ぎたというだけだが、最初に旅行したのは昭和三十九年である。以来、私はマンガ週刊誌に戯文をすこし書いただけで、外国についての文章は一切書かなかった。

しかし昭和四十六年になって、突然外国とのかかわり合いについて書いてみたい気持が起った。

外国を旅行するということ

二十年くらい前、私はある人に言ったことがある。

「もし将来、世界一周をする機会があったとしたら、本当のことは何も分らなか

った、という文章を書いてみたい」

当時は、外国を旅行することには、一種の晴れがましさがあった。私にはそういう機会がくるとは到底おもえなかったので、羨望嫉妬も混っているの発言だったような気がする。しかし、多分に堅くそう信じていたことも、事実である。

現在では、招待旅行の機会もときどきあるが、概ね辞退している。何も分らないのは覚悟で、ぶらぶらしてみるのにも魅力がないわけではないが、健康状態が許さない。

だいたい、四十六年のあいだ住んでいる日本のことも、分らないことが沢山ある。

東北地方というのはいろいろの問題を孕んでいる土地で、ここには行ってみたい気持があるが、まだ果せない。二十年前に考えていたこと、すなわちいくら外国旅行をしても、上っ面のことしか分りはしないというアイディアは、なかなか

上等のものだと自負していた。いかに分らないか、ということをやユーモア（むしろエスプリと言ったほうが正確であろう）をもって語ろうとおもっていた。

しかし、残念なことに、北杜夫の『どくとるマンボウ航海記』に先を越されてしまった。

昭和三十九年に、私は四十歳になった。この時期になると、小説家や評論家のあいだでは、外国へ行った経験のない人間は珍しい存在になってきた。

友人たちをみても、遠藤周作はフランスの大学を卒業しているくらいだから別格として、阿川弘之、庄野潤三、小島信夫、安岡章太郎とつぎつぎに、ロックフェラー財団の招きで、一年間のアメリカ留学に出かけている。三浦朱門は曾野綾子と一緒に、幾度も世界のあちこちを旅行している。

このころになると、外国旅行にたいしての羨望の気持はまったく私の心から消え去っていた。まして、知らない土地に一年間滞在することを義務づけられるな

どということとは、考えただけで厭な気分である。むしろ、一度も国外へ出たことのない小説家というのは、珍奇な存在となつて面白いではないか、という考え方も生れてきた。しかし、その在り方に固執する気持もなかった。

要するに、億劫なのである。おそらく生涯自分は海を越えることはあるまい、とおもっていた。

ところが、一人の女が私を外国へ引摺り出すことになった。三十五年に私は家庭を捨て、以来この女と一緒に暮している。この女は、女性という種族の特徴（可憐さ、やさしさ、馬鹿、嫉妬心、吝嗇、勘の良さ、遅しさ、非論理性、嘘をつくこと、すべての発想が自分を中心にして出てくること、などなど）を、すべて極端なまでに備えていた。私はこの女のことを、M・Mという頭文字で、文章の中に登場させたことがある。そういう配慮など分らぬ女で、「なぜ自分だけローマ字の符号なのか」と拗ねる。「みんな知っていることじゃないの」と言うが、

この「みんな」という発想自体が間違っていることに気付かない。仮に世間周知としたとしても、それだから私の手で書き記していいものだとは限らぬことが分らない。しかし、いま実名で書いてしまうと、宮城まり子という女優兼歌手である。スタアと呼ばれてブームを起していた時期もあった。すべてにバランスのとれた人間というものが存在するともおもえないが、スタアというのはとくに片輪なところがある。

私は、家庭を捨てる気持はなかった。

そのことは、宮城まり子（これからあとの文章では、Mと符号に戻す）にも、繰返し強く言って置いた。しかし、家庭に満足していたわけではない。私は慣性型体質とでも名付けたらいいだろうか、その体質が心構えに擦り替り、一つの場所から動かないことが信念のようになってしまう。億劫、という言葉では足りないくらい、動きたくなくなるところもある。

そういう私を、Mは家庭から引摺り出した。それと同じように、私はMに外国に引摺り出されたのである。

気がついてみると、旅行のための手筈はすべてMの手によって整えられていて、私は旅行社の青年と一緒にパスポートの手つづきに出かければ済むだけになっていた。

交付されたパスポートのうちの一頁を見て、私は驚いた。入国を許可されている国の名が横文字で並んでいるのだが、その数がおびただしい。

アメリカ、イギリス、スエーデン、スペイン、スイス、香港、ノールウェイ、デンマーク、ドイツ連邦共和国、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、オーストリア、フランス、イタリア、パキスタン、レバノン、タイ。

これは、旅行社の考えではない、と直感して、Mに言った。

「こんな、ばかばかしくヴィザを取ったって、仕方がないじゃないか」